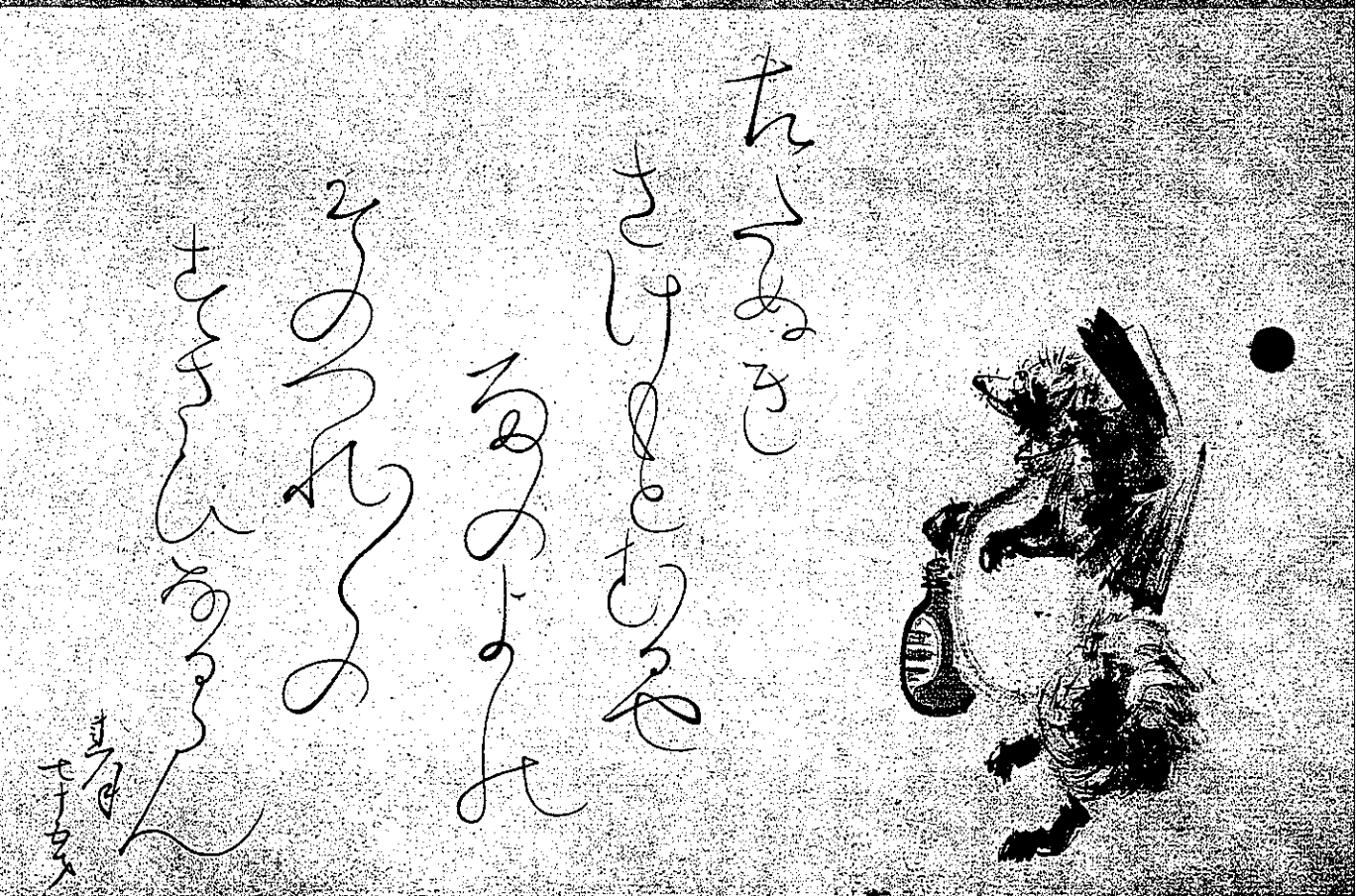
村上忠順翁顕彰会報



目　次

あいさつ

●「蓬の露」について……1ページ

●忠順とその周辺の資料(一)……3ページ

●忠順とその周辺の資料(二)……5ページ

●歴史探訪記……7ページ

●羽田野敬雄略年譜……8ページ

●表紙のことば……8ページ

●編集後記……8ページ

村上忠順翁顕彰会報

第　9　号

編集　村上忠順翁顕彰会

事　務　局

発行　平成10年3月1日

村上忠順翁顕彰会

村上忠順翁顕彰会発足十年によせて

豊田市長　加藤正一

季節はめぐり、さわやかな候を迎えました。ここに村上忠順翁顕彰会会員の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

貴顕彰会は、平成元年に発足され、いよいよ今年は十周年を迎えられます。

過去、歳々に積み重ねてこられた調査と研究の成果は会報や資料として会員に広く紹介され、忠順翁の顕彰と地域文化に貢献されました。

忠順は幕末の激動期にあって寸暇を惜しみ勉学にいそしむかたわら東奔西走の日記を残し国学者として又歌人としてその名をとどめ、知名人との交流は数多いと聞き、本市にとって誇るべき一人であります。

さて本市は、本年四月一日をもちまして中核市となりましたが、これも実に多くの先人の惜しむことのない努力と決断の歴史があってのことです。そういう意味で、私たちが拠って立つ郷土の歴史を知り、そこから多くを学ぶ取り組みは、まさにまちづくりの要諦であり、皆様方のご活躍に敬意を表する次第です。おわりに顕彰会活動十年の成果を心の糧とし、心のかようまちづくりに生かされることを望み、ご挨拶といたします。

十周年を迎えて

村上忠順翁顕彰会会長　石川隆之

今年も日々映りかわる中、みどり豊かな季節となり、自然のリズムを感じるこのごろであります。

村上忠順翁顕彰会は今年も各事業が会員の皆様方のご協力によってスムーズに運びおかげさまで十周年を迎えることが出きました。心からお礼を申し上げます。

今年度も歴史探訪は九回目を数えて「羽田野八幡宮文庫と華山の故郷へ」を企画しました。豊橋市図書館内羽田野文庫の見学と講話を聞き忠順翁との交流の一端を知ることが出きました。田原町立博物館においては渡辺華山について見学が出き、久しぶりに渥美の旅が満喫でき楽しい思い出多い日帰り研修会でありました。

平成元年一月に発足しました村上忠順翁顕彰会は十年目を迎えました。これは一重に、豊田市を始め、築瀬先生のご指導と協力と会員の皆様、事務局、役員さんのご尽力の賜であります。皆様方に心から感謝を申し上げます。

ともに「十周年記念展」事業にはご協力を戴きますようお願い申し上げます。

豊田市は四月一日より準政令都市として中核市へ移行いたしました。福祉、保健、医療、環境、都市計画など市民により身近で質の高い行政サービスの拡充が図られ二十一世紀に向けての地方分推の受け皿として大きな政策課題への取り組みが始まりました。又、本年十一月三日にはコンサートホール、能楽堂、中央図書館がオープンします。よりよい生涯学習の場が整ってまいりました。

終りに会員相互の研鑽と親睦を深めつつ地域文化を育み顕彰会活動を進めてまいりたいと思います。併せて皆様のご健勝とご多幸を心からご祈念申し上げます。

村上忠順十年祭歌集『蓬の露』について

簗瀬一雄

一

忠順は明治十七年（一八八四）十一月二十三日に、七十三歳で没した。その十年祭が明治二十六年に行なわれ、その折に献詠された和歌の集がこの『蓬の露』である。兼題は、寄書懐旧と冬懐旧の二題である。半紙判の和紙に活版印刷した三十四丁の袋綴で、その末尾の二丁は、忠淳の「故翁忠順の十年祭に霊の前に申し、詞」で、跋文に宛てられている。これに対して序文は、本文の前に、丁数を刻さないで二丁分が、本居豊穎（とよかい）の筆蹟のまゝ、印刷して掲げてある。「明治廿七年七月はつかあまりに本居豊穎しるす」とある。豊穎は宣長の曽孫にあたる人である。

所収の歌は短歌の他に数首の長歌をも含むが、詠進者は北海道から九州まで、ほゞ全国に亘っている。題別に数えてみると、寄書懐旧は二三一名、冬懐旧は七五三名で、追悼歌集として驚くべき数である。書名の『蓬の露』は、忠順の号「蓬廬」にちなんだものである。編輯兼発行者は忠淳で、明治二十八年五月二十日発行の非賣品である。出詠者には贈呈されたことと思うが、今日では殆ど見かけなくなってしまっている。

二

多くの詠出歌の中から、歌人として名の通った人の短歌を数首ずつ抄出し、いささかの解説を加えながら、鑑賞してみようと思う。はじめは、寄書懐旧の部である。

亡人の世にあらはし、書とりて見る度々に忍ばるゝかな　　鈴木重嶺

国学者としての忠順の著作をたゝえて、なつかしむ気持をそのまま述べた歌であるが、第四句の「見る度々に」に工夫があるようだ。通常用いる「度毎に」であると、事柄の客観的叙述にすぎないので、その「度毎に」の上に、それが屢繰り返しての経験になっていることについての詠嘆として表現しようと、ねらったものであるように思われる。

亡人と何おもひけむかき残すこの水莖ぞやがてきみなる　　阪　正臣

この歌では、題詞の中の書を、書籍ではなくて、書きものと解して詠じている。「水莖」は筆、従って筆で書いたもの、こゝでは短冊か手紙と見ればよい。「やがて」は今日の意味とはちがって、即ちとか、それがそのまゝの意で用いてある。もうお亡くなりになったのだと、どうして思ったのであろうか、こうしてお書きになったものを手にとると、たちまちにあなたが彷彿するのにと、故人に対する親愛の情が実によく詠われている。

今も猶なげきこるねや絶えざらむ文のはやしの奥の杣が家　　拜郷蓮茵

この歌はむつかしい。まず全体が「文のはやし」という語を中心に据えて「なげきこる」「ね」「杣が家」をその縁語として用いたのである。「なげき」は嘆きであり、「なげきこる」はその嘆きが凝り固まる意であるが、その中の「きこる」は山林の木を切ることを暗示させてある。「ね」は音で、嘆きの声であるが、木の関連からは根で、木は切られても根は絶えないと云って、人は亡くなっても、そのかかわり深いものは残っているという気持を匂わせているのである。「文のはやし」は漢語「文林」の和訓語である。文苑・文壇の類語と思えばよい。「杣が家」木を伐る杣人の住む家であるが、こゝでは「文のはやし」との関連で、文壇の大御所という風に、忠順の業績をたたえる気持ちをこめた表現になっている。こうして、用語を分析し、解説すると、極めてやっかいに見えるけれども、近世の和歌の詠風に通じていれば、何のこともなく容易に受け取ることが出来るものなのである。

お宅ではお嘆きが絶えませんでしようが、多くの書物をお残しになった故人の偉大さは皆が景仰いたすところでございます。―遺族に対して、こう挨拶した歌である。題の書は「文のはやし」にこめられているので、落題ではない。

とけぬ節問はむたつきのなきぞうき形みの文の数は多けど　　飯田守年

この歌は判り易い。「たつき」は便宜である。立派なご遺著は沢山あるけれども、直接

に質疑することが出来ないのが残念であると、嘆いたのである。

かきおきし書の林に立ちよれば君がみかげの今ものこれり　富田良穂

「書の林」も「書林」の和訓語で、「ふみのはやし」とよむ。書物の多く集まった所で、文庫や書斎を指す。書店の意に用いることもあるが、こゝではちがう。「かきおきし」は生前に著述して、今に残されたものを指す。第四句の「みかげ」には、御面影とご恩恵の両義がかけてある。述べてある内容はよく判るが、全体として、いささか平板に過ぎるであろう。

いにしへを忍ぶ思ひにくらぶれば文庫の書の数は物かは　竹尾正久

「文庫」は「ふみくら」で、略して「ふくら」ともいう。「物かは」は反語表現で、物の数ではないと、追憶の私情の大きさを述べたのである。これもよく判るが、やゝ平凡である。

唐大和ふみわけし名を世に残し天に帰りし君をしぞ思ふ　早川千代子

「ふみわけし」は、書物を指す「ふみ」と、解説する意の比喩表現である「踏み分け」を掛けことばとしている。和漢の書を読破し、研究した故人の充実した生涯を讃仰したこの歌には、過不足のない穏当な表現によって、作者の気持がよく判る。一見平凡のようであるが、決してまずい歌ではない。私はこうした純正な態度の詠出を見のがしたくないと思うのである。

三

次に、「冬懐旧」の歌を見ることとする。

まとゐし、昔の人を忍ぶ草うれさへかる冬はきにけり　植松有経

「まとゐ」は円居で、集会すること、「忍ぶ草」は追憶の象徴、「うれ」は末で、草の先端。「かる、」には、草の枯れることと、歳月の距たることがかけてある。親しかった故人との十年のへだたりを、冬の枯草を材にとって、嘆いたのである。

ふみわけて跡とふしもの枯生にも残る蓬の香こそかくれぬ　本居豊穎

故人の雅号の蓬廬の蓬をもって、その業績が今の世にも蕭りつづけているとたたえたのである。初めの三句で場を設定し、その臨場感を生かして詠っているところがうまい。

村しぐれたえず注ぎて奥つきの苔の上さへ乾かざりけり　千葉胤明

「村しぐれ」は冬の景物であり、故人の墓の苔までが濡れている様を、詠出する作者の嘆きの涙の象徴としているのである。比喩歌の部類に属する作である。

又更にけふの時雨にぬらす哉すこしかわきし去年の袂を　鈴木弘恭

年祭の日をむかえて、嘆きを新たにしたという、下句の表現に工夫のあとが見える。

村時雨ふりしよのみぞしのばる、火桶のもとの物語にも　小出粲

「ふりし」は、時雨の降ったこと、、今からは遠く隔たって古くなったこと、をかけてある。「火桶」は木製の火ばちである。十年祭の折に集って、皆で火桶に手をかざしつゝ、故人をしのぶ情況描写で、作者の嘆きを表現したのである。

高かやを刈谷の里の風の音はむかしの冬にかはらざりけり　井上頼國

「高かやを」は刈谷」の「刈る」という語の縁語として、これを枕詞風に置いたのであるが、又その「高かや」には茅の草丈の高さに、故人の高潔な人柄を暗示させてある。更にこの「高」が風音の強さに関連し、それが故人の世評を連想させるので、こう分析するといかにもやっかいであるけれども、実はこれは和歌表現の伝統的テクニックになっていることで、前に掲げた拜郷蓮茵の歌の場合と相通じるのである。冬の風音は昔にかわらぬと云って、今は共に聞く由のない故人を追懐したのである。

わすれてもあらぬ昔を神無月おどろかしぬる初時雨かな　大口鯛二

「神無月」は旧暦の十月である。もう来月は故人の亡くなった月だよ、まるでそれを忘れてでもいるかのごとく、さあと云うように初時雨が降ることよと詠ったのである。「おどろかす」はねむりをさまさせる意で、初句の「忘れても」に対応させてある。月日の移ろいと、それによる季節感で、故人への追憶をうまく表現したのである。しみじみとした初句の詠い出しがうまいと云うべきであろう。

ふみ置きし跡をみる〳〵浜千鳥影もなぎさに音をぞ鳴くなる　松の門三艸子

これも伝統的技法をフルに用いた歌で、明治の新傾向の歌人からは唾棄される部類の歌である。しかし、それはそれとして、私はこうした旧風をも、その枠内で評価すべきだという立場に立つので、この一首をやはりうまいと、肯定するのである。順序を逆にしたが、以下分析的解説を加えておく。

「ふみ置きし」は、千鳥が踏んで足跡をとどめた意と、書物を世に残しておいた故人の業績とを、掛けことばで表現してある。「影もなぎさに」の方は、故人がこの世にあらぬことを暗示しつゝ、浜千鳥のいる汀を指している。「音を鳴く」は勿論千鳥について云うのであるが、それが故人をしのんで泣く作者の象徴になっている。「音をぞ鳴くなる」とした係り結びの強調表現も、ピタリときまっているのである。

たま祭る十とせもはやくめぐりきてまたそでぬらすむらしぐれかな　橘　道守

これはかなり長い長歌の反歌として詠まれたものであるが、長歌は省略して、これだけを採り上げる。十年祭に際しての、追憶の悲しみが、平明に、何のけれん味もなく歌の形を与えられたという風である。真情をそのままストレートに表現している点を、尊いと思うのである。（終）

忠順とその周辺の資料(一)

築瀬一雄

資料というものは常に湮滅の危険にさらされている。であるから古人は筆まめに写しついだのであった。古事記でも源氏物語でも方丈記でも、すべてが伝写本であって、原本はことごとく天災・人災の餌食になってしまった。近世のものについても、油断は出来ない。忠順のものは幸いなことに、刈谷市中央図書館や村上家に多く保管されているけれども、これらも出来る限りは復本を作って、万一に備えなければならない。私は日本の古典の収集とその保全に努めて来た。そして碧沖洞叢書一〇〇輯を昭和四十七年に完成し、その再版が平成八年に出た。しかし、私の手元には翻刻すべき資料の山が残っているので、出来る限りはと、老骨を鞭打って原稿を作りつゞけている。さて、上記の考えから、本誌には標題の如きものを、少しでも載せていただきたいと思う。いずれも私の手元に保管してある原本の翻刻である。

(一)松本奎堂添削の忠順草稿

安政戊午除日深見篤慶家○挿梅花于瓶中忽有黄鳥来入鳴其朶傳聞之人莫不奇爭餽佳什詩歌○以賀之於是作其図以為一軸云○

人皆乃言葉廼花毛艶也梅春鳥尓所誘乍花鳥乃色音尓曽辺一人皆能言乃葉草毛香哉

(二)忠順三千代夫妻の八景歌

八景　三河国碧海郡堤村士族　村上忠順（タヽマサ）

向岡桜花　あひのりの車にさゝむ妹と和賀むかひの岡のはつ桜花

玉川漁舟　玉河にうかへるあまのいさり舟いさ言とはむえものありやと

関路過雁　戸さしつゝゆるさぬ関をかへる雁いかてこえけむ過所なしにして

小野夜雨　さよふけて笠やとりせむかたもなしむら雨をゝく小野のわたりに

武野秋月　わけ入れハタつゆふかしむさし野の尾花か袖にやとる月かけ

国分寺晩鐘　かへらはやさわらひたをる山寺に日も入あひのかねひゝくなり

冨士晴雪　ふしの山いゆきはゝかる雲はれてをのへにたかくつもる白雪

筑波遠霞　うた垣の昔の手ふりみるへきに霞こめたりをつくはの山

老衰病中之野吟伏乞玉斧　三川堤村　村上三千代子

向岡桜花　朝夕にむかひの岳のさくら花なれも我をハ友と見るらむ

玉河漁船　たま川にあまたこきいつるいさり舟いさ打のりてあゆこつらはや

関路過雁　と、むへきよしこそなけれ小山田の関ち過行初かりのこゑ

小野夜雨　きくやいかにそほふる小雨いかならむ小野の里人いねかてにして

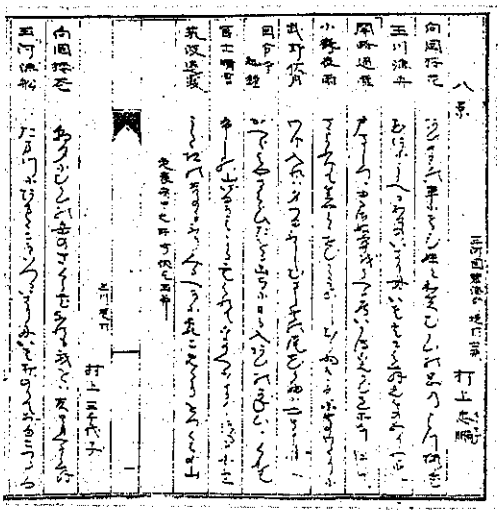
武蔵秋月　むさし野の尾花か袖にまぬかれて露わけいれハ月のさやけさ

国分寺晩鐘　夕くれをつける野寺のかねのおとハ聞なれてたにおとろかれけり

冨士晴雪　八重雲のはれまあふけはみな月のもちにもきえぬふしの白雪

筑波遠霞　きのふよりとほさかりぬるつくは山このもかのもに霞たつらむ

老耄不調鄙詠加斧惟祈



(三)忠順の父忠幹の詠草

早蕨

春日野の草ハやくとも見へねとも今萌出る野辺の早蕨

深山木のかけの、下の早蕨を爪木わすれて折る杣人

雲雀

すみなる、床を雲雀のあくかれて霞の中に声あかる也

春の日の野への霞の下風に雲雀ふかれて雲に入也

花

雲のうへに鶯のもろ声音つれて花の盛りハ長閑也ける

嶺よりハ風吹そへて散か、る水に流る、花筏哉

辰二月下旬　忠幹

(四)忠順とその縁者の短冊

○

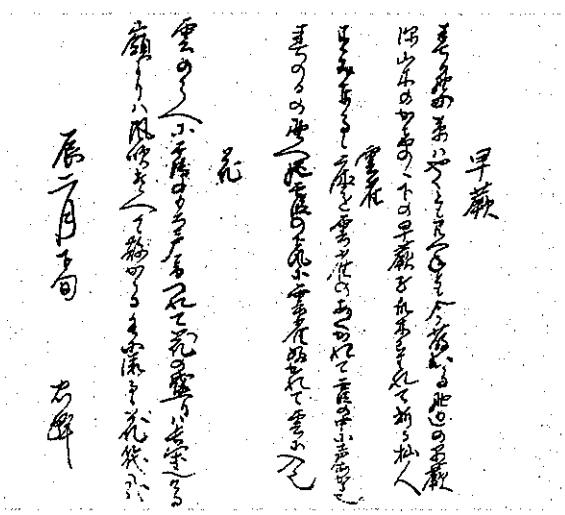
人こ、ろあしまのかにのよこはまをいさやまちゞむまずらをのとも　蓬

花のうたよみける中に

咲ぬれはこ、ろをよせぬひともなしうへもさくらは花のおほまへ　忠淨

名所花

おもしろきたきの木のまに花咲きてたくひあらしの山さくらかな　忠淨



水辺月

月すめは水もすミけりかけうつすみつと月とはおもふとちなる　忠淨

殘花

なつ山のかひなりけりなさくら花青葉か中にみゆる雲はや　篤慶

○

ちきのこる菊のあさ霜きえかへり君しのふ身ハをりてたむけむ　愛子

忠順と その周辺の資料(一)

簗瀬一雄

(五)忠順の讃羽田八幡宮文庫（懐紙軸装）

羽田八幡社之主祀賢木園君。平素好読書。著述頗富。上師先哲下双群賢。探六史之原窺皇統之緒。口不絶唸歴朝之詞手不停披百家之編。以敬事神祇発明古道為己任。嘉永元年造営文庫于社傍。將以遍納群書傳之不朽。夫文庫者中葉諸国往往有之。就中金沢文庫人偏識之。荒廃之後衆籍散失。其址今僅存為僧居。而其書間有在書賈之手者。軽薄子所竊販攷。抑亦往昔兵乱中所掠者攷。甚可惜也。今之所建則出於君之至誠。成于神休貺者実堪垂不朽。是雖歴千歳豈有荒廃如金沢然乎。可謂翁之功偉哉。忠順有好書癖。雖稗史小説拮据不舍。聚諸斎中居常樂之。然家貧不能普獲之。平生為発慨嘆。頃日得翁折簡。始知有此挙欽羨甚矣。夫世間雖有凡百之樂無過読書之樂者。宅日儻得閑必將周覧於庫中。翁也無薪幸甚。即今隨翁之所乞献両三雑籍。又呈一二蕪詞。誠敝帚之小策鄙俚之芻語耳。満顔生汗。幸勿叱斥云。

八幡社頭以建書樓。　如山如阜如岡如丘。
如鳩之鳩書籍汗牛。　樓之成矣後世多福。
書之輯矣日用過讃。　主祭祠官式昭神徳。
如月初出如日初升。　四方書籍日臻月増。
嗚呼文庫不蹇不崩。
嘉永二年春　村上忠順

(六)忠順添削の忠淨詠草（その一）

柳隨風　忠淨上

青柳のみたれかちなるすかたをも
ともすれば
風は心にまかせぬるかな

契待恋

ちきり置しことのミ深くたのむよは
ふくるもしらて猶またれけり
あ
そまたる、

(七)忠順添削の忠淨詠草（その二）

連夜照射　忠淨上

さつ人の罪いかならむよな〳〵ニ
の

は山しけ山しけきともしに
さつ人のあかしなれたる五色山
あはれいく夜かともしさすらむ

牧童

ひくうしのおそきあゆみニまかせつ、
かへさいそかぬ野路の夕暮

鉄道

くろかねを千里の道ニしきわたし
安く行かふ御代ニもあるかな
ふみまよふ人やなからむ一すちニ
しきわたしたるかねの細道
あはれこのかねの細道ほそけれと
千里のをろもやすくこそゆけ

(八)忠順添削の忠淨詠草（その三）

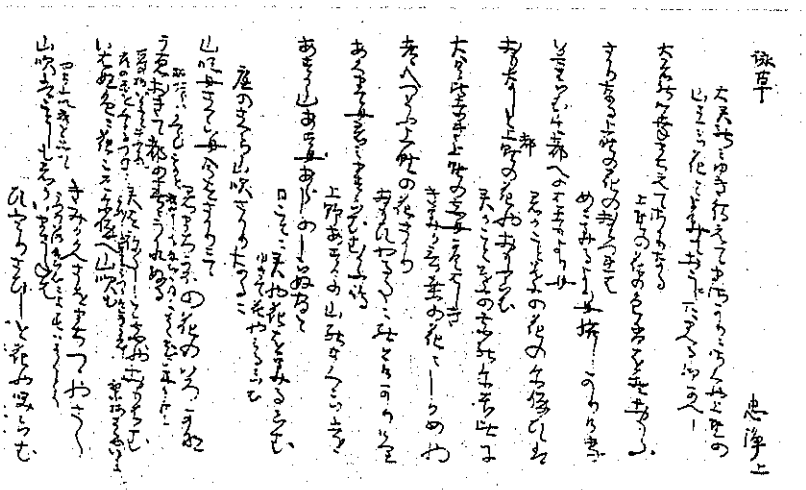
忠淨上

詠草

大君のミゆき待えてまさかりニさく
や上野の山さくら花とよみておこし
たまへる御かへし

大君の御幸まちえてさかりなる
上野の花の色香をそおもふ
さかりなる上野の花のおとつれは
めこみるよりも嬉しかりけり
いかならむ其都へのはなよりも
君かことはの花のにほひは
おもなしと上野の花やおもふらむ
君かことはの花のにほひに
たくひなき上野の花もかくはしき
きみか言葉の花こしかめや
都人つとふ上野の花さかり
おもひやるたこのとけかりけり

あくまても君ミますらむむかふ嶋
上野あすかの山のさくらを
あすか山あすもあらしのしらぬ間と
日ことニ君や花をみるらむ
庭のさくら山吹さかりなるニ
山吹もさくらも今をさかりニて
君まちかほの花のいろかな



（忠順歌）
翅あらハかへらむものを我なしもまちかほ
にさく花の木かけに
うゑおきて都の春とうかれぬる
君をねたしと花やおもはむ
（忠順歌）
古郷の梢いかにと思ふかな都の花をみる
につけても
よな〳〵に夢にミつる今年うゑし初花桜
さくやいかにと
いはぬ色ニ花こそにほへ山吹も
きみかかへさをまちつゝやさく
山吹はことしも君かいまさねは
ひとりこひしと花や咲らむ
（忠順歌）
やよ山吹我を思ハゝうつろハてけち心ニ
よ春ハすくとも
こそことし立よらぬをハうらむなよ又こ
コハコゾモ家ニイマサネバナリ
む春のなかるへしやハ
花のころ東京ニいます父のもとへよ
みておくりける
さくら花うつろひゆかはすみた川
すみなれぬ間ニとくかへりませ
（忠順歌）
すみた川すミなれぬる事と思へとも猶こ
（家人カ）
ひしきハ□なりけり
花のうた
日数ふる春の長雨もこゝろせよ

庭のさくらは今さかりなり
庭さくら花咲しよりをやミなく
日をふる雨のこゝろなきかな
ふりつゝく雨そわりなきさらぬたニ
花のさかりはみしかきものを
雨ふれとうつろふへくもみえぬかな
けふやさくらのさかりなるらむ
庭さくら咲をおそしとわかまては
をりしりかほニ春雨そふる
うかれ出て花みることもかたき身は
なか〳〵雨のふるものとけし
いかニせむ野山の花は咲ぬれと
世のことわさニいとまなき身を
源氏物語榊の巻を
つれなしとおもひすてゝも榊葉の
かはらぬいろをかつやたのみし
都のミおもひやられてすゝか川
わたらぬさきに袖やぬれなむ
わかれなはきえもしぬへし暁の　此方
露とみたるゝこゝろまとひニ
白椿園富田禮彦かひとめくりの忌ニ
花といふことを
しのへとも今はかへらぬ人の為
せめて花をはかたミともみむ
なれもまたこその春をやしのふらむ
ものおもはしき花のいろかな　○
のとかニもめてましものをさくら花
君かかたみとみるそかなしき　○米
なかむれはこそしのはれて桜花

にほふ木かけも立うかりけり

小浜村萬福寺朴道か五十賀ニ寄木祝

としことに枝葉しけれるときは木の
ときはのかけニ君そ千代へむ

おく山の岩ねニおふる玉椿
八千代や君かよはひなるらむ

ときはなる色をは君ニゆつる葉の
いよ〳〵さかえて千年へよきみ

花のうた

うつろふをいそかぬ花のさかならは
日をふる雨もなにかいとはむ

此春は風のうらみもなかりけり
雨ニうつろふ庭さくらはな

風ニのミいかてまかせむよるも猶
めかれすまもる庭さくら花

いつれも可なり

(九)画帖の和歌

豊橋の白文堂という古書店で、大分以前に入手した画帖には画が少く、和歌と俳句が多い。岡崎の好事家の旧蔵の由である。中に、ここに書きとめておき度い三人の歌があった。

月下砧　篤慶

つきかけの清き軒はにをとめらか
手たまもゆらにころもうつなり

樹陰泉　登之野女

松かけの岩間をつたふさゝれ水
なつをもしらぬ夕風そふく

恋のうたの中に　忠淨

父はゝのいさめをまもる人たにも
まよふは恋のやミち也けり

歴史探訪記

―忠順の足跡をたずねて―

第九回を迎えた「歴史探訪」は、晩秋のさわやかな風を感じる霜月半ばの一四日に実施されました。

過去八回は、忠順の旅の日記（村上家保存）をたどり、又あるときは忠順所縁の地を訪ね忠順翁の事跡にふれ、調査や会員自らの勉学に心を置き、忠順翁の顕彰に努めそれぞれが大変意義深く感銘を残す旅でした。

今回は、忠順の知友で国学者羽田野敬雄が残した「羽田文庫」豊橋市と、「渡辺華山の故郷」田原町を訪ねました。

羽田野敬雄は、西の村上・東の羽田野といわれ忠順と並ぶ優れた国学者でした。忠順との交友については文通（手紙）があったことで明らかです。現在、村上家に保存されている敬雄からの手紙は十八通あり、その全部を愛知大学田崎哲郎教授が「愛大史学」誌に紹介されました。

文通のあった時期は、今から一五〇年前の嘉永元年（一八四八）、忠順三七才、敬雄五〇才から万延元年（一八六〇）、忠順四九才、敬雄六二才までの一二年間でした。

この間における忠順の身辺では、三男忠淨の出生、本居内遠に入門、四男純の出生、太田垣蓮月を介して高畠式部との文通、父忠幹歿、忠順刈谷藩主土井候の侍医となる、草分衣日記（江戸行）、がありました。

さて、私たち一行が見学した羽田八幡宮文庫（羽田文庫）は、嘉永元年（一八四八）羽田野敬雄、福谷世黄、佐野蓬宇等が発起人となって書籍と基金を集めて建設され閲覧室や講義室も建てられ、広く学を志す人々に公開されました。吉田藩主、水戸徳川家、三條大納言等からも蔵書の寄贈を受けています。

慶応三年（一八六七）には蔵書数は、一〇三六〇余巻に達しました。

敬雄の死（明治一五）後も文庫は一般に公開されていましたが次第に経営が行き詰り蔵書は売却されました。明治四四年羽田文庫の散逸を措しむ人達の手によって買いもどされ九二七一冊が豊橋市立図書館に、又約一〇〇〇冊が西尾市岩瀬文庫に継承され現在に至っています。

顕彰会一行は、豊橋市立中央図書館に着き冨永健次副館長の出迎を受け二階の講堂へ案内され、ここで東三河地方史研究会々長秦基さんより「羽田野敬雄と文庫」について講話を聞き、その後一般の人は入ることのできない文庫の中まで見学させて頂きました。

書庫内は、時代を感じる古い書籍が整然と納められ、汚れのしみ込んだ古書は往時を偲ぶに足り、歴史の重みを感じ深い感銘を受けました。

つぎに、羽田八幡宮にほど近い「羽田文庫跡」を見学しました。ここは現在管理人によって管理保存されていますが事情があって売りに出されていると聞きました。願わくば、いつまでもこのままで保存されることを祈らずにはいられません。

さて、豊橋の名物に「菜めしでんがく」がある。老舗きく宗は昔しながらの木造で今も繁盛している。

ここで昼食。一行は狭い通路を入り階段のきしむ音を気にしながら二階へ案内され小部屋に分散し、でんがくと菜めしを賞味しました。

午後は豊橋市を後に田原町博物館へと向いました。折しも小雨となりバスから傘をさして博物館へ入り渡辺華山遺作の数々を見学しました。

華山については、画家としてよく知られていますが、華山は幼小のころから儒学を学び更に蘭学をもきわめた学者でもあります。又四〇才で田原藩江戸家老となり政治の面でも大きな功績を残していますが蛮社の獄（道理のわからぬ投獄）など苦労も多く、天保一二年（一八四一）四九才で自らを「不忠不孝」者と言って自刃して果てました。

この博物館から近いところに華山の位牌堂となっている城宝寺があることを知ったのは、今回の計画をたててからしばらくしてからのことでした。早速寺へ連絡をとり、今回の見学と墓参が実現しました。

この寺には華山の墓と立派な天井絵があり、住職の説明を聞きながら見学することが出来ました。

この寺で参加者四六名全員で記念写真を撮り、今回の旅は全て終了し無事に帰郷しました。

付　羽田野敬雄略年譜

（幼名…兵作・茂雄　号…佐可喜・栄樹・栄木）

一七九八寛政一〇、宝飯郡御津町西方、山本三郎茂義の四男に生れる。

一八一八文政二一、羽田野上総敬道の養子となる。

一八二五文政八、二八歳の時本居大平の門人となる。

一八二六文政九、二九歳の時神主となる。

一八二七文政一〇、三〇歳の時平田篤胤の門人となる。

一八四八嘉永元、五〇歳の時文庫設立（佐野権右衛等一五人と共に。

村上忠順宛手紙あり。

一八五三嘉永六、吉田藩主より書物三七巻・毎年米一〇俵を賜る。

一八五六安政三、松陰学舎、誦習舎を造営、閲覧所として開放する。

一八六八明治元、京都皇学所御用懸命じられ、講官となる。

一八七〇明治三、豊橋藩皇学校教授を拝命。

一八七七明治一〇、太政官より権少教正に補せられる。

一八八二明治一五、自宅栄樹園にて歿す。八五歳

一九〇七明治四〇、蔵書売却される。

表紙のことば

古たぬき　さけもとむるや
　雨のよの　そのつれづれの
すさびなるらん　蓮月七十五才

蓮月七十五才の「雨夜たぬき図自画賛」です。忠順の交友太田垣蓮月は幕末の京に生きた女流文人で、寛政三年（一七九一）に生れ、明治八年（一八七五）八五才でその生涯を終えました。蓮月の特徴のある筆跡と画を表紙にとりあげました。

編集後記

平成と年号が改らたまり、早や一〇年を迎えました。

平成と共に歩んだ当顕彰会も設立一〇周年を迎えます。

今回も簗瀬先生から貴重な原稿を頂き謹しんで掲載させて頂きました。

今年度の歴史探訪（羽田文庫見学）は忠順の交友羽田野敬雄翁を知ることが出来、折しも、敬雄から忠順宛の手紙も公表されました。

これで又一つ忠順の交友と新らしい一面を学ぶことが出来ました。